

5 吃音と生きる

就職活動という大きな壁

近藤雄生
ノンフィクションライター

1976年東京都生まれ。東京大学大学院修了後、5年半にわたって世界各地を旅・定住しながらルポを執筆。08年に帰国。著書に「游牧夫婦―中国でお尻を手術―」「終わりなき旅の終わり」など。

面接で名前が言えない、集団面接でディスカッションできない……。吃音のある若者たちは最大の壁の前で悩み、もがき、途方にくれ、改めて自らと向き合う。

二〇一六年三月のある晴天の午後、京都大学構内のカフェレストラン「カンフオーラ」の屋外の席は、春の訪れを感じさせながらもまだ少し肌寒かった。その席上で八木智大は、友人と私を前に声を震わせながら長年の思いを絞り出した。

「本当に悔しい。本当に悔しい……」
中学・高校時代、自分があれほど吃音に悩み、苦しんでいたのに、教員たちはみな見て見ぬふりをした。誰一人、吃音のことで声をかけてはくれなかった。授業中であてられても、どもって何も言えないことが多かった。中高時代をともにした黒田和裕は、その様子をよく覚

えている。特に数学の授業のときのこと。一人ずつ順番に指され、「わかりません」と言う生徒が多い中、八木は答えを言う初音で詰まってしまう。言うことができない。「ろ、ろ、ろく、……。担当の若い男性教師は八木には時間が必要なことを知っているのに待とうという様子は全くない。「次！」と言って、八木が答える機会を与えようとしなかった。そんなときいつも、机に突っ伏して泣いてたんだ、と八木がテーブルの一点を見つめながら告げると、黒田は、知っていたよ、と優しく言った。そして尋ねた。

の内奥をもさらけ出せるようになるまでに経てきた日々の重さを想像した。

八木は京都大学文学部に通っているが、昨年、四年に進学する際に休学した。三年次も後半に入りいよいよ就職活動を始めなければならぬという段階で立ちすくみ、動けなくなってしまうのだ。

それから一年が経ち、間もなく休学期間を終え、今度こそは四年生になろうとしていた。そしてこのとき八木は、教員になりたいという気持ちが強めつつあった。かつて考えたことのなかった教育の現場に立つという仕事になぜいま、就こうと思うようになったのか。吃音に翻弄されながら、自分の生きる道を真剣に模索し続けてきた八木の思いが、この日私

一日に三〇回くらい「死にたい」

就職活動は、吃音のある若者にとって最も大きな壁の一つとして立ちはだかる面接で名前が言えない。集団面接で他の学生とディスカッションなど到底できない。コミュニケーション能力が特に重視

される現代の就職活動においては吃音があるとうしても不利になる。

症状も状況も一人ひとり異なるが、吃音で悩む学生は、それぞれに不安を抱え就職活動の時期がやってくるのを恐れている。吃音があっても自分は社会に出て働くことができるのか。その問いの前で、みなどうすればいいのかわからず途方にくれる。八木もそんな一人だった。

私は八木を二年以上前、彼が大学二年のときから知っている。最初に会ったのは一三年十月に京都で行われた吃音に関する講演会の場であった。講演後の質問の時間にまず手を挙げたのが八木だった。小柄で少年っぽさのある彼は、立ち上がる

ると話し出しから激しくどもった。「お話をありがとうございます」というひとことを言うために、一分も二分もかかった。あ、あ、あ、いや、あ、あ……。ひたすら同じ音を繰り返して一向にその先の音が出てこない。会場にいた数十人の聴講者の多くは、吃音の当事者か関係者だったが、みな思わず一瞬視線を向けるほど八木の吃音は重かった。それ

「八木ちゃんは何で自分からその悩み、先生に言わへんかったの？ 自分からは言っへんかったよね？」
八木は、青いコートのポケットから手を出して、メガネを外して涙を拭きながら、ゆっくりと記憶をたどった。「うん、そうやね。言えなかった。あのころは吃音について自分から人に話すことができなくて……」。

八木はこの二連の会話の間、ほとんどもらずに話していた。「八木ちゃんは昔から感情的になるとどもらない」。そう黒田が言う通りの姿を見ながら、私は、「言えなかった」八木が、こうして自ら

でも彼は諦めない。なんとか言葉を出すきっかけを作ろうと手を動かしながら、細い緑のメガネの奥から前を見すえ、一音また一音と絞り出していった。

八木の姿は強烈に私の中に焼きついた。私は、後にあるきっかけからネット上で連絡を取るようになると、すぐに会って話を聞かせてもらう機会を得た。冬真っ只中の一四年一月、十人ほどしか入れない小さなカフェの席に並んで座った。八木は、木の机の上に開いた私のノートに時々文字を書きつけながら話してくれた。幼少期のこと、大学に入って塾講師バイトの面接を八度受けてすべて落ちたこと、それでも社会とかかわっていきける何かをしたいと思いつけてきたこと……。

その後、吃音関係の集まりでばったり会って話したり、たまに連絡を取り合ったりという付き合いが続いていった。私はこの二年以上の間、吃音のある人に数多く会っていったが、八木の印象はずっと強く残り続け、何かあると私は彼のことを思い出した。というのまます、八木の吃音が重かつ

れた苦悩があった。

吃音を受け入れる

八木に初めて吃音が出たのは二歳のときだったと彼の母親は記憶している。そのときは一時的だったが、小学二年の秋ごろには本人も自覚するほどはつきりとした症状になっていた。

授業で本を読まされるときなどはひどい難発になり、時に何も言えなくなった。幸い、話し方でいじめられることはほとんどなかったものの、ある日、音読の宿題をしようとして、母親の前でうまく読むことができなかった。八木の悩みの深刻さに気づいていかなかった母親は、「落ち着いて言いなさい」と告げたが、何度読んでもどまり続ける八木を前に、ついに泣きながら怒ったのだった。「なんでちゃんと言われへんの?」。その様子にショックを受けて、八木も泣いた。

その後母親は、八木の苦悩を理解し、吃音について懸命に学び、ありのままの八木を受け入れてくれるようになった。担任の先生が替わることによって学校に説明に

も行った。さらに四年生になると、言葉

の発達に遅れなどがみられる子どものために小学校に併設された「ことばの教室」に通うことで、吃音の悩みを話せる場を外にも得ることができ、八木の気持ちはぐっと楽になったという。

そのまま残りの小学校時代は、吃音のことはあまり気にせずに過ごせたが、受験して入った中高一貫の私立の進学校で状況は悪化した。点数が何よりも重視される雰囲気の中で、彼の吃音が顧みられないことは一切なく、高校へ進むとさらに症状も悩みも深まっていく。なんとか治せないかとできることを試したが、どんな方法も効果はない。本を読んで調べようにも、図書館に行ってもどうしても検索の画面で「吃音」という文字を打つことができなかった。打てば自分の吃音を認めることになる。治らないだろうことを知ってしまったのも怖かった。しかしそれも限界が来た。高二のとき、ついに自ら調べ出した。そうして二年次が終わるころに、吃音のある人の自助団体「言友会」の設立の中心的存在であった伊藤伸

たことと、にもかかわらず彼が、人前で積極的に発言をし、どもる姿を隠そうとしない様子に時に圧倒されたからだ。いくらどうもっても落ち込んだりする素振りも見せず、飄々と話し続ける。その上、京都大学新聞の記者として障害者問題について取材して記事を書くようになるなど、彼にとって決して容易ではなさそうなどにも挑戦し、苦難を乗り越えようとする力強さに私は心打たれてもいた。

しかし、積極的に動く裏で八木は猛烈に苦しんでいた。一時彼の精神状態が極めて悪化していたことを私は後から知るようになった。彼は、大学二年当時を振り返ってブログに次のように書いている。

《一日に三五〇回くらい「死にたい」とつぶやいていた。もちろんつぶやくときは人に聞かれないようにしていたが、時々阪急電車の中で無意識に「死にたい」とつぶやいて、やば、誰かに聞かれませんか...と思うことがあった。お風呂でシャワーをしながら「わー」と叫んだり、お風呂と布団の中で泣いたりしていた》

涼しげな表情の奥には、深く刻み込ま

二の本に出合うことになったのだ。

「その中に、書いてあったんです。吃音は治そうと思って、治るものではないから、吃音を持ったまま、いかに生きるかを考えよう、と。小二からずっと、どうすればどもらないか、数々の方法を試してきて、すべて失敗していたので、伊藤さんの考え方を、受け入れざるを得ないと、感じました。それがぼくにとって、吃音を、受け入れる第一歩でした」

その後八木は、吃音を隠さずに、どもつてもやりたいことをやろうと思うようになっていく。すると高三になって状況は少しずつ好転した。友人の黒田も、八木が授業中に自ら手を挙げるようになったのを覚えている。「雰囲気がすごく変わったなって感じました」。受験勉強で忙しく人付き合いが減ったことも、吃音による悩みを軽減させた。

しかし一年浪人して京都大学に入学すると再び苦悩は大きくなった。吃音をもったままでも人とかかわりたいという気持ちが強くあったものの、実際には容易ではなかったからだ。思うようにコミュ

ニケーションがとれず人間関係が築けないことへの悔しさやもどかしさに深く悩んだ。以来、様々な悩みながら、四年近くの月日を過ごしてきたのだった。

模索し立ち止まる日々

「いや、あ、あ、あの、じつは、きゅ、休学、したんです」

八木が休学し始めた一五年の春、彼のそのことを直接会って教えてくれた。その前年、三年次の秋、休学を決める直前には、就職活動の重圧によって大学に通うこともできなくなっていたという。いつもの平然とした表情だったが、前に進めない苦しみが痛いほど伝わってきた。苦笑いを見せて状況を話す彼の姿を見ながら、私は、自分も大学四年になるころに同様に悩んだことを思い出した。

当時の私の吃音は八木に比べると症状は軽く、周囲に気づかれずに過ごすことができる程度ではあったものの、隠すために費やすエネルギーは大きく、悩みは深かった。自分の名前が言えないため面接を通過できる気などしなかったし、会

社の人と電話でやり取りしなければならぬ可能性を考えただけで逃げ出したくなった。私は大学院に行くつもりだったので、四年になっても就職活動があったわけではない。しかし友人らを見て、数年後の自分を想像しながら足がすくんだ。その未来から逃げるように、私はフリーで働くことを真剣に考え始めたのだ。

一方八木は、逃げることに必死だった自分とは違った。吃音と正面から向き合って、自ら道を切り開こうとした。

水泳やランニングで身体を動かし、カウンセリングにも通った。ヒントを得られそうな本も数多く読んだ。吃音のある人が主宰する劇団で演劇をやるようになった。また、以前から興味を持っていた日中の学生の交流団体で活動を始める。休学中の秋には台湾へ短期留学することも計画していた。どもつて困る機会が多そうなことであっても、彼は果敢に挑戦した。いずれも直接吃音を改善させるような活動ではなかったが、自らの感覚に従って八木は積極的に動き続けた。

大学二年のころ、言語聴覚士の羽佐田

竜二のもとへ名古屋まで通っていたこともあった。本連載でも書いた通り、『新潮45』一四年七月号)、羽佐田が自ら開発した吃音改善のための訓練方法は、重い吃音に長年苦しんだ三十代の男性、高橋啓太の状況を大きく変えるなど、少なからぬ効果を上げていた。だが八木は、感覚的に自分には合わないかもしれないと感じ、四回ほどで通うのをやめている。長い間吃音を治そうとしても治すことができなかった彼にとつて、吃音は発声の問題だけではない、より深い何かに根差したものだという思いが生まれつつあった。彼はなんとかそこを探り当てようとしていたのだ。

休学期間も半年が過ぎ冬が近づいてきたころには、八木は、計画通り実現させた二カ月ほどの台湾留学から戻ってきた。帰国するとすぐフェイスブックに、出版業界やテレビのディレクター職などに就きたいという旨を書き、動き出しているようでもあった。台湾で何か前向きな心境の変化があったのかもしれない。そう

想像した。

しかし、帰国から三週間ほど後に会ってみると、必ずしもそうではなさそうだった。八木は元来、外国とかかわりを持つて仕事をしたと考えていたが、台湾での日々を経て、外国語を使って働くのは自分には難しいと実感したと言った。中国語や英語では吃音が余計ひどくなり、コミュニケーションをとることがさらに難しくなったからだ。台湾に行く前に、日中の学生の交流団体の活動で訪れた北京でも同様の経験をした。その結果、以前から興味があったもう一つの分野であるメディア業界が残ったということだった。「今度、NHKの、ディレクターの人にも、会いに行く予定です」

そうも言ったが、気持ちは曖昧なままであろうことが言葉の端々に感じられた。八木がテレビなどの仕事をするとすれば、吃音を乗り越えてでもやりたいという強い意志が必要だと思っただが、それは感じることができなかった。

八木はきつと迷っていたのだ。なんとか吃音と折り合いをつけながらやってい

こうと思える仕事は何なのか。模索しては立ち止まり、そしてまた模索するということを、彼は悩みながら繰り返し返しているように私には見えた。

教員への深い思い

年が明け一六年になってから、八木が携わる活動に私でもできる限り同行させてもらうようになった。八木はいわゆる就職活動をしている様子はなく、吃音に関する活動に頻繁に参加していた。

一月には京都言友会で八木が自分の体験を話すという場が設けられた。二月に入ると、吃音のある就活生同士の集まりに参加し、さらには、京都の公立小学校で開かれた「ことばときこえの教室」に通う小学生との交流会にも出席した。

就活生同士の集まりでは、カフェにどつた二十代の若者七人の中で様々な意見が飛び交った。吃音の影響が少なそうなお仕事を選ぶべきか、純粹にやりたいことを貫くべきか。就職活動の際に、吃音のことを会社に伝えるべきか否か。みな口は重そうだったが、話を振られるとい

くらでも話したいことがあるようだった。参加者の一人に、京都女子大学の宮脇愛実がいた。交流会を企画したのが彼女だった。その場の司会進行をし、快活でしっかりと話をしているように見える彼女も、吃音に深く悩まされてきていた。「私は自分の吃音が大嫌いで、仲のいい友だちにも吃音で悩んでいることについては一切言わないで過ごしてきました」

吃音に負けたくない。だから就職活動が始まると、あえて営業など話す仕事に就こうとまで思っていた。彼女の症状は、言い回しを変えたりすることである程度は隠せたが、特に「お」で始まる敬語を言うのが苦手だったこともあり、面接での心理的負担は多大だった。吃音は隠したい、しかしそうしようとすればするほど本来の自分を出すことができない。数十社の面接に悉く落とされ続けた。隠すことも苦しかった。

「でも、誰に相談しても、吃音のことは会社には言わない方がいい、いまのまま大丈夫だからって言われるんです」そんなとき、大切な出会いを得た。障

害者にかかわる会社で働く人物から自己分析をするためのシートを手渡され、過去のことを思い出しながら書いていくと、自分がいかに吃音に支配されて生きてきたかに気づかされた。シートの大半が吃音に関することで埋まってしまったのだ。すると、シートを見たその人物が言ってくれた。「本当に辛かっただろうね」。宮脇はその場で泣き崩れた。

「自分の苦しみを初めて受け止めてもらえた気がしました。私はこのときようやく、自分の吃音を受け入れられそうに思っただけです」

吃音はずっと自分の一部であり続けている。このまま否定し続けていいのだろうか。吃音があるからこそできることもあるのではないか。そう思えると、気持ちも変わり行動も変わった。いまの経験を生かせる分野で働きたいと明確に思うようになり、面接でも自ら積極的に吃音のことを話すようになった。そしてようやく一つ内定を得ることができたのだ。「就職活動を通して、私は考え方が一八〇度変わったようにも思います」。

宮脇は、力をこめてそう言った。宮脇の苦悩が幼少期からの積み重ねであるように、小学校で開かれた「ことばときこえの教室」の交流会に来ていた小学生たちもそれぞれに日々、まねされたり、うまく言えなくて辛い思いをしたりという経験を繰り返していた。二年生のある男の子は、空手が得意で大会を勝ち進みながらも、試合の前に自分の名前を言わなければならないことが大きな壁となっていた。「恥ずかしいのを、直したい、です」。足でリズムをとりながら、照れくさそうに、彼は話した。

八木も自らの経験から、子どもたちの苦悩がよく理解できるに違いなかった。小学生との交流会においては、大人の参加者同士の意見交換の場でこう言った。「ぼくは小学校時代、吃音はいつか治ると思ってたから、自分のように大人になってもどもっている人を見て、ショックを受ける子も、いるのではないかと、気持ちがあります。それでも、こうした交流の場は、貴重だと思います。ぼくもまた是非、参加したいです」

八木と一緒にそうした会に参加しながら私は、彼の様子、吃音のある若者たちの姿を見ていった。各々に抱える苦悩の深さを改めて知った。そして八木と話を重ねる中で、彼の気持ちが徐々に変わっていつているらしいことに気づかされた。「いま、小学校の先生に、興味が出てきているんです」

いつしか彼はそう話すようになっていた。メディアと言っていたのがつい最近だったため、あるいは就職活動への恐怖心が再び大きくなってきたということなのかもしれないと私は感じた。教員を目指すのであれば、とりあえずやるべきことはそれまで考えていた就職活動とは違ってくるだろうからだ。疑問を率直に尋ねると、彼は否定はしなかった。「自分でもそういう面はあるかもしれない思っています。正直、わかりません」。

しかし聞くほどに、八木の教員への思いが、彼の中に深く根差したものであることが感じられるようになった。そして三月、京大構内のカフェレストランで涙

れた。「障害者理解教育」の一環で、吃音のある大学生が自らの体験を生徒に話すのだという。授業を担当している教員自身に吃音がある関係でこのような場が設けられることになった。八木にとっては、実際に吃音のある教員とその生徒たちには会える願ってもない場であった。

授業は中学二年生二クラス合同で行われた。板張りの広い部屋で四人の大学生と私が前の席に並び、四十人ほどの生徒の前で、それぞれ六、七分、思いを話した。担当教員の吉永章人は、生徒たちに話すときも言葉を詰まらせて苦しそうにすることが多かった。どうしても言葉が出ないときは白板に書いた。生徒たちもそのことをよくわかっていて、それゆえ大学生らが言葉に詰まってもみなじつと待ち、真剣に耳を傾けた。

大学生たちはみな落ち着いて話ができようだった。それぞれ短時間の中に自らの経験を率直に語った。私も時間をもたえたので、いま思うことを短く伝えた。吃音を一つのきっかけとしてライターになったこと。中学時代には想像もしなか

を流し、中高時代の教員たちへの悔しい思いを表す八木の姿を見たとき、「教員になりたい」という彼の気持ちの核にあるものがはつきりと見えた気がした。

「京大に入ったときは、将来は吃音とは関係なく、健常者」の世界で競争して戦っていく、という気持ちでした。大学の中に吃音を克服し、世界で活躍する人間になる。八木はそう考えていた。

しかし大学に入っても、吃音は重くのしかかり続けた。自分はずっと吃音を背負って生きていかなければならないのか。そう思わざるを得なくなるにつれて、辛かった中高時代の記憶が思い出された。あのころ先生たちに少しでも手を差し伸べてもらえていたら、何か違っていたかもしれない、と。「あの学校では、一人ひとりの個性や問題が配慮されることなく、まるで軍隊のようでした」。

そこには、点数や効率が最優先される日本の教育システムの悪しき典型があるように八木には見えた。もちろん、いまの苦悩のすべてを中高時代に帰せられるわけではないことは彼自身もわかってい

った道を進んでいるけれど、だから人生は面白いということ。自分の弱みやコンプレックスと向き合うことで本当に合った生き方が見つかるかもしれないということ……。少しでも生徒たちの記憶に残る言葉になっていればと私は願った。

授業後は、教員の吉永と私たち五人とで職員室内の一室で一時間ほど話をした。それぞれ授業中には言えなかったことを共有できる場となった。

大学生の一人は、すでに就職先が決まり四月から社会人になる予定の男性だった。長野で育ち、ずっと吃音に悩まされ、環境を変える意味もあって大学から大阪にやってきた。だが吃音の症状は変わらずにやっめたまま大学生活は過ぎていった。

就職を考える段階になり、吃音があってもクビにはならないだろうと公務員を目指したが、受からなかった。地元の市役所は一次面接で不合格になった。

その後一般企業から内定を得たが、昨年十月の内定式での自己紹介でひどくどもった。「十秒ほど、何も言えなくなってしまう……」。後の立食パーティで、

る。ただ八木は、吃音で苦しみ続けた経験によって、あのような教育の持つ問題を点を切実な思いで感じ取ったのだ。

「企業にとっては、効率が一番大切かもしれないですね。吃音は、効率という点だけでいえばおそらく、マイナスです。でも教育で、何よりも大切なのは、子ども一人ひとりと、向き合うことのはずです。ぼくは、教員になったら、子どもとしっかり向き合いたい。同時に、子どもには吃音のある、このぼくに、向き合ってもらうことで、伝えられることが、あるんじゃないかなと、思うんです」

彼の中で眠り続けていた思いが、就職活動という大きな壁の前であがき、苦悩する中で、具体的な形を持って表に現れたように私は感じた。八木は、本当に自分がやりたいこと、やるべきこと、ややく気づけたのかもしれない。

吃音があるからこそ

二月某日、私は八木と他三人の大学生とともに大阪府箕面市の公立中学校を訪

人事の人に呼ばれて問われた。その話し方でやっていけるのか、と。そしてそれをきっかけに最近、障害者手帳を申請したんです、と彼は言った。日本の現行法では、吃音は発達障害者支援法の対象となるため、基本的に、精神障害としての申請となる（身体障害ではなく）。

「精神障害ということには正直戸惑いはあります。でも、このまま吃音のことを必死に隠しながら働くよりは、障害者という扱いになっても、みなに自分の問題を理解してもらった方が気持ちも楽だし、ぼくにとってはいいんです」

吃音は、WHO（世界保健機関）による国際的な疾病分類「ICD-10」において、「小児（児童）期及び青年期に通常発症する行動及び情緒の障害」という項目の中の、「その他」とも解せる分類に入っている。原因等が不明だからだ。つまり、医学的にどう位置づけるべきか現段階では決まっていないが、この分類によって日本では発達障害者支援法の対象となっているのだ。ただ吃音が発達障害者支援法に入ることが広く知られるようになって

たのはまだ数年前でしかなく、実際に精神障害として申請し、障害者手帳を取得した例は多くないという。それ以前、身体障害として手帳を申請するケースもあったが、取得できることはまれだった。

状況はとても曖昧なのだ。「取得できたら会社に伝えることになりませんが、申請してよかったのかどうか、いままも悩んでいます」。彼は揺れ動く気持ちで率直に話してくれた。そしてこのときみなで話す中で私は、八木が以前、身体障害者手帳を申請して却下されていたことを初めて知った。手帳の問題で悩んでいる人は少なくないだろうことを想像した。

教員の吉永は、まだ二十六歳で大学生たちとも年齢が近かった。彼はこれまで吃音のある人と話した経験がほとんどなく、だから、同じ悩みを持つ同世代と話せることが本当にうれしいと言った。

「いままも悩むときはすぐ悩みますけど、最近ようやく、そんなに気にしなくてもいいのかもしれないと思えるようになりました。授業中、教科書を読めないとき、生徒に『一緒に読んで！』って言うこと

もあります。保護者にも他の教員にも吃音のことは伝えていません。迷惑をかけてしまうのは辛いですが、理解してもらえているのでありがたいです」

人のよさそうな笑顔には、数知れぬ苦労が刻み込まれているように見えた。

「自分は小学校のときには不登校の経験もあります。学校にうまくなじめなかった人間なんです。でも、いろんな先生がいていいはずだから、一人ぐらい自分のようなのがいてもいいんじゃないかなって思いながら、教員をやっています」

メガネの奥の眼差しを優しく崩して話す吉永を見ながら、私は思った。きっと彼は生徒たちにとってかけがえのない存在なのではないかと。自身の苦悩を正面から見せる吉永にだからこそ本音を言える。そんな生徒が必ずいるような気がするのだ。

八木が中高時代に必要としていたのも、吉永のような教員だったのかもしれない。「先生は話す仕事だから、吃音があると難しいのではと思っていました。でも先生だからこそ、障害などを抱えた人がな

感じていて、この日も思わず彼に言った。

「ほんとに、変わりましたよね」

八木がこの少し前から通うようになっていた場に、「からだごとことばのレッスン」がある。演出家の故・竹内敏晴が自らの体験をもとに作り上げた全身を使ったレッスンで、身体や言葉のあり方を見つめ直すためのものである。吃音の改善を目的とはしないものの、八木はこのレッスンを通じて、話すことに対してこれまでとは違う感覚を得ているようだった。私も一度、大阪で八木と一緒にレッスンを体験したが、全身の力を抜き、身体の自然な有り様に身を任せていると、八木が得ている新たな感覚というのがなんとなくわかる気がした。

このレッスンのみならず、八木が自身の感覚に従って行っている複数の活動、そしてそこで得た人との出会いが、彼自身に変化をもたらしているのだろうかと思ふ。変化は自身も感じていた。

「ここ一年ぐらい、吃音の症状も、だいぶ変わってきている気が、自分でもしています。また吃音、そのものとは別に、

ることに意味があるのだとも感じます」

八木は吉永にそう言った。八木もまた、教員になるとすれば、彼だからこそ果たせる役割があるに違いない。「吃音があってもできる」のではなく、「吃音があるからこそできる」ことがきつとある。

私はこのとき、そう確信した。

苦しみだけではない何か

「吉永先生の姿は、ぼくにとって、救いだし、励みに、なりました」

三月のある夜、八木と彼の母・茂美と三人で三条大橋の近くの店で食事をした。そのとき八木は真剣な表情でそう言った。教員になるために今後彼が採るべき方法も具体的に考えているようだった。八木はきつとこの道で行くのではないかと。穏やかな表情で見守る母親の隣に座る彼を見ながら、私はふとそう思った。

そしてこの日、八木の話聞きながら、私は改めて感じていたことがあった。彼の吃音が、二年以上前に初めて会ったとき比べて随分軽くなっているらしいことだ。この数カ月、私は会うたびにそう

駅中央口の地下一階のプロントに現れた宮脇は、リクルートスーツ姿だった。

「これから最終面接があるんです」。

彼女は、いままから最終面接を受ける会社と、すでに内定を得ている会社に加え、もう一つの選択肢の間で揺れ動いていることを教えてくれた。もう一つというのは、吃音のある人たちの就労サポートを担うNPO法人「吃音とともに就労を支援する会」(サイト名「どーもわーく」)からの誘いだった。宮脇は吃音を隠し続けて生きてきたが、このころには吃音とかかわって生きていきたいと強く思うようになっていた。そしてその数日後、彼女は喜びに満ちたメッセージを届けてくれた。

「どーもわーく」に決めました！」

吃音の苦しみから開ける道があることを

八木や宮脇は教えてくれる。就職活動

はその一つの起点になりうるのだろう。

その先にどんな世界が広がっているのか

は一步踏み出してみなければわからない

ただなんとか、各人がその一步を踏み出

してほしい。私はそう願っている。